
紫紺の邪眼 夢幻の章

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫紺の邪眼 夢幻の章

【コード】

N6872Q

【作者名】

刹那

【あらすじ】

紫紺の邪眼の外伝。主に麻帆良に来る前の主人公の話です。

初仕事と大蛇（前書き）

章管理の関係で、これが最新話扱いされるらしく、更新しても更新通知がないと知人に指摘を受けましたので、外伝は別に独立させることにしました。

初仕事と大蛇

「くそつ、まだ駄目か…」

徹は、自身の手にある得物を見つめ毒づいた。それは、9歳の少年でしかない自身より長大な剣。妖かしたる刃『封蛇』である。彼が、徹心の養子になる際、連れていかれた蔵の中で選ばれて以来の付き合いになる相棒である。

しかし、相棒というものの、徹は未だその力の全てを使いこなすことはできないのだった。今日もその全てを使いこなさんと、修練に勤しんでいたのだが、結局彼が望む領域に至ることはできなかったわけである。

「くそつ！封蛇よ、いつになったら俺を『使い手』ではなく『主』と認めるんだ？！」

思わずそんな言葉が出るが、『封蛇』に変化の兆しはない。徹は焦っていた。封神妖流の術技のうち、すでに『使い手』が使えるものは、ほぼ完全にマスターしている。これより先の奥義の習得に至るには、どうしても『主』にならなければならない。だというのに、徹は『使い手』となつて以来、1年以上かけているにも関わらず、『主』になることは叶わなかったのである。最初のうちは、気長にやれば良いと考えていたのだが、一向に変化の兆しが無い上に、鍛錬がそれ以上先に進まなくなってしまったので、流石に焦ってしまったのだ。

「そこまでにせよ。それ以上は体に障る。焦つてもどうにもならんぞ」

養父であり師である徹心はそんなことを言うが、徹はそれを受け入れられない。彼には、強くならねばならない理由があったからだ。あの御方曰く「『未知』を見せろ」との事だったが、それは決して平凡な生を送れということではないことを徹は理解していた。この肉体に備わった能力を考えれば、それはありえないことだからだ。

常人を遥かに超えた身体能力に加え、異常魔力保持者の魔力、さらに全身に張り巡らされた魔力の道、極めつけは両眼に宿る紫紺の邪眼だ。戦えと言わんばかりの戦闘に特化した能力だと徹は思っていた。なぜなら、徹はこれらが原因で、日常生活において凄まじい苦勞をすることになったからである。

なんといつても、困ったのが力加減である。病室で自身の身体能力を理解してからというものの、彼は跳躍すれば10メートル以上飛び、何かを掴めばそれを砕いてしまう等、細心の注意を払って動かねばならなかった。気を抜いたりすれば、明らかに常人ではありえない挙動をしてしまうだけでなく、一つ間違えば人を殺傷しかねないのだ。おかげで徹は、常人と同程度に身体能力を手加減ができなかった最初の一ヶ月は神社の境内からでることができず、外出を許されなかった。

ある意味、身体能力以上に難儀したのは魔力と魔力の道である。元々、魔法使いでも何でもない一般人である徹には、それを制御する術など知る由も無かったのである。加えて、肉体の本来の持ち主であるツールズが、制御をはじめとする魔法の修行を全くしてこなかったために、肉体自体も魔力に慣れていなかったのである。そのせいで最初の3ヶ月の間、徹の体内の魔力は荒れ狂い、徹に日常的に激痛を与えた。これなら、素直に死んでた方がましだったと思う程に……。しかも、無理やり作られた道のせいで、制御が出来ていない魔力は容易く暴走し、あちらこちらで騒動を引き起こした。このせ

いで、身体能力の制御に成功しても、彼は外出を許されなかった。

意外にも、最も日常生活に役立つたのは、紫紺の邪眼であった。この眼のもつ『理解』の力は、日常生活にも役に立ち、語学にはじまり物理・化学・数学：e t c . 種々の学問やこの世界における常識や元の世界との差異を学ぶのに目覚ましい貢献をしたのであった。さらに、戦闘においてズブの素人であった徹に、どうやって剣を振るべきか、どうやって体を動かすべきか等を『理解』させ、戦う者としての土台を体得できたのもこの眼のおかげであった。特に魔力の制御についてはそれが顕著であり、本来長年かけて慣らしにくく魔力をごく短期間に慣らす荒業をやったのけられたのは、一重にこの眼のおかげであった。

ただ、無論メリットだけではなくデメリットも存在した。例えば、最初のうちは、ON/OFFの切り替えが任意ですることができず、予期せぬところで発動してしまったりして、見たくないものを見てしまったりしたし（人間の眼というものは無意識に見るものを選択しているのだが、それができない状態となる上に、霊とかその類も見えてしまう）、意図せず自身含む人間に暗示をかけてしまうなど。他にも、前世での知識に加え、眼のおかげで頭が良すぎるせいで、最早肉体年齢相応の学校に行くというのは無駄であり、苦行でしかなくなってしまうた。さらに、見えすぎる眼（筋肉の動きから血流まで見ることが可能）のせいで、情報量を脳が処理しきれなかったのである。長時間使うと強烈な頭痛に苛まれ、しばらくの間盲目状態になってしまうことすらあった。

ちなみに麻帆良に行く頃には、邪眼の発動については任意でON/OFFできるよう制御ができ、学力及び精神年齢の問題は海外への留学&飛び級という力技で解決し、長時間使用による弊害も、脳の方が慣れたのか起こることはなくなった（実際には、悪魔の血肉

によつて、魔人化が進み、その過程で脳が耐えうるように適応された。ちなみに麻帆良に来ている時点で魔人化はすでに終了している。要するに数年後には解決しているのだが、ここでの徹にとっては、現実問題として存在する。

（正直、明らかに日常生活を送るために必要な能力じゃないよな。邪眼の視界とか本気で洒落にならんし、非日常が見えすぎて嫌すぎる。まるで、非日常がおいでおいでと手招いているようだ…）

というのが自身の能力に関する徹の感想であつた。

結局、徹は戦わざるをえないという結論するほかなかつた。なにせ、この身を十全に生かし、かつあの御方の要求を満たすには、闘争に身を置くのが一番であることも、厳然たる事実であつたからだ。

故に、徹は急いでいた。あの御方がどういつつもりかは知らないが、いずれ己が闘争の中に身を置くのは避けられぬ事である。それは、既知という退屈に飽き飽きしていたあの御方が、徹という未知を使いさらなる未知を望んでいる以上、必然であると言えた。

ならば、力をつけておくにこしたことはないのだ。いずれ訪れるであろう戦いの運命に打ち勝ち生き残るためにも。もし、あの御方の意に反することになつても、それを押し通せるだけの力を得るためにも。

この時の徹は、本気で運命とか考えていたのであつた。自身は誰よりも強くあらねばならないという脅迫観念にかられ、ただひたすらに力を求めていた。あえて言うならば、彼は現実を見ていなかったのである。遠く先の未来にあるかもどうかもわからない運命に怯え、自身は悲劇のヒロインであるかのように、その状況に浸っていたのだ。

これには、この世界が漫画の世界であるという徹の認識が大きな要

因となっていた。彼自身は、『小宮山 徹』という名前を貰い、この世界で一人の人間として生きるという決意をしたつもりであったが、実際のところは、まだまだ現実として受け入れられていなかったのである。邪眼による非日常の視界、常人を遥かに超えた身体能力に魔法の存在が、彼にあたかも物語の中にいるという認識を捨てきれぬものにしていったのだ。この認識は、徐々に改められていくものの後々に至るまでしぶとく残り、人物評に原作知識を用いるなどの悪弊を生み出す源泉となった。

そんな調子であったから、妖刀である『封蛇』との意思疎通がうまくいかないのも当然であった。徹は現実を現実として認めておらず、薄っぺらい物語だと認識しているのだ。そんな者を『主』として認めるほど、『封蛇』は甘くない。妖刀を振るうということは、覚悟が必要なのだ。なにせ、妖気とは生きとし生けるものにとつて、猛毒であり狂気を導く。これを苦しめないのは、妖魔か鬼か、いずれにしても尋常の存在ではない。しかも、それらの存在にとつても、他者のそれは毒であり狂気となりえるのだ。その妖気を莫大な量で保有する『封蛇』は、『主』・『使い手』にその莫大な妖気を受け容れる為の器を求める。そして、同時にそれを使いこなすだけの意思の力を必要とする。すなわち、狂気に吞まれないだけの精神力を。

そういった意味で、徹は器（『使い手』たる条件）としては合格（魔人化しているので、妖気との親和性は高い上に、封神妖幻流の継承者たる血筋の肉体なので、元々そつちの適性は高い）でも、意思（狂気に負けないだけの精神力）では不合格であった。ゆえに、彼は『主』たりえないのだ。当然であろう。人を殺すことをキャラクターを殺すことと勘違いしているような男に、どれ程の精神力を望めようか。

「ふむ、ここまでやって『主』になれんとはな…」

徹心は、徹が『主』になれない原因に薄々気づいていた。なにせ、徹の封神妖幻流の習得速度からいって、いい加減に『主』になってもいい頃合だったからである。そもそも邪眼と魔人化の恩恵で、徹は凄まじい速度で妖気の扱いや制御を覚えており、妖気としての親和性は元より、徹が器として十分であるうことが分かっていた。ゆえに、徹が『主』になれないのはその意思にあるのだと、徹心はあたりをつけていた。

(しかし、こやつは必死ぶりからして、意思が足りないとは思えんがのう。荒れ狂う魔力の激痛に耐え切ったことからしても、精神力はかなりのものだと思うのじゃがな…)

徹心は、必死の形相で『封蛇』に呼びかける徹を見つめながら、そんなことを思う。徹心は、徹が根本的な考え違いをしているとは思いつきもなかったのである。

その日の鍛錬が終わり、少し早い夕食となった。徹が『主』にならない以上、これ以上の術技を教えることはかなわないからである。

「徹よ、お主が『主』になれないのは、お主自身の意思に原因があると思うんじやが、何か心当たりはあるか？」

徹心は、本人に言った方が早いかもしれぬと直接問た。

「私の意思？いえ、心当たりはありませんが…」

「そうか…。あるいはと思ったのじゃがな」

徹の答に落胆する徹心。

「なぜ、意思が問題だと思われたのですか？」

「己でも原因を探していたので、思わずその理由を問う徹。

「うむ。お主は、自分で選んだのではなく、妖刀に『選ばれた』。ゆえに、器としての条件は満たしているはず。なれば、足りぬのは意思ではないかと思つたのじゃ」

「そうですね…。少し自分でも考えてみます」

まさに正鵠を射たのだが、徹心も徹もそれを知る由も無かつた。

翌日、徹は徹心に鍛錬ではなく仕事を課されることになった。これ以上、術技の伝授ができない以上、実戦経験を積んだ方が有用であると徹心が判断したのだった…。というのは建前だったりするのだが、徹は知る由もない。

図らずも徹は、初めての仕事であり緊張していたが、それは無用なものになりそうであつた。仕事内容は関西呪術協会要人の令嬢護衛であつたが、徹以外にも護衛が幾人もついていたからである。どうか、明らかに徹はおまけのようであつた。それも無理はないことである。裏の世界に雷名轟く封神妖幻流とはいえ、徹はまだ9歳であり、護衛対象である令嬢とそう年が変わらないのであるから。

「あら、君が妖閃翁の息子さん？話は聞いているわ。お嬢様の相手をよろしくね」

リーダー格であろう護衛の女性が、徹にそんなことを言う。どうやら、彼女達は徹に令嬢のお守をさせるつもりであるようだ。徹は、小さい子供にいい聞かせるような態度に些か以上に腹が立ったが、今の己が周りから見れば無名の子供でしかないことを理解しており、同時に己にこの場での拒否権がないことを悟っていたので、黙って頷くほかなかった。

徹は知らなかったが、実のところ護衛ではなくその為に呼ばれたのだったで、当然の対応だったのだが。

「うち、木乃香いうんや、よろしゅうな」

一人、屋敷の庭に通され、そばに寄ってきた徹を遊び相手と認識したのか、要人の令嬢である少女がそんなことをいつてくる。

「私は、小宮山 徹です。よろしくお願いします」

「なんで、そんな話し方なん？なんや、かたい感じがするわー。それにもっと笑ったほうがええよ」

仕事モードの徹の話し方と表情が気に入らなかつたらしく、木乃香はむにーと頬を引っ張られる。

（このガキ！人が抵抗できないのをいい事に…。
というかなんでお守？護衛じゃなかったのか？もしかしてはめられた？！そーいや、親父がでげにニヤニヤしてたよう…。あのクソジジイ、はめやがったな！）

彼も周囲から見ればガキなのだが、精神年齢上、そんなことを思っ
てしまう。でもまあ、子供の無邪気さ、しかも天然な木乃香を責め

るのは酷と言うものである。

同時に、今更徹心の真意に気づいたのだった。つまり、徹の仕事は最初からお守であり、護衛では無かったのだ。それもそのはず、徹心が気分転換のためにしくんだものであったからである。

「木乃香様、おやめ下さい」

「様ななんていらん。木乃香でええよ。それにもっと普通に話そうや。かえんといつまでもこのままやでー」

怒りを押さえ、礼儀正しくやめてくれるようにいつてみるが、反対にもっと頬を引っ張られ、呼び方と話し方を変えるよう強要される。周りに助けを求めるが、皆微笑ましいものを見る表情であり、助ける気はゼロであった。

「わかったよ、これでいいんだろ。やめてくれ！」

徹は観念して、仕事モードを解除した。

「うん、それでええんや。それじゃあ、改めて今日は一日よろしゅうなあ」

「ああ、よろしくな」

満面の笑みでよろしくを言う木乃香にどこか居心地の悪いものを感じながら、徹は仏頂面で返事をしたのだった。

「疲れた…」

「お疲れさん、ご苦労だったね」

「はは、大変だったみたいやな」

その日の夕方、疲れ果てた様子で屋敷を出る徹を口々に労ってくれる護衛の人達。

「子供は風の子、元気の子でしょ。しゃんとしなさい！」

沙霧（リーダー格の女性のこと）が檄を飛ばすが、徹は完全にグロッキーであった。肉体年齢は子供でも精神年齢はおっさんである。一日、無邪気な子供につきあえば、仕方のない結果であった。ましてや天然な木乃香である。その精神的疲労は並のものではない。さらに、木乃香はとにかくよく動く。広い庭を駆け回り、池に落ちそうになったのをフオーしたの是一次や二度ではない。ままごとにはじまり鬼ごっここにかくれんぼ、おはじきやお手玉といった古風な遊びまで付き合わされ、肉体的にはどうということはないが、精神的に疲労困憊な状態であった。

そんな徹を余所に、予想されていた襲撃がなかった事に護衛達は胸を撫で下ろしていた。木乃香の父である長に不満ある西の過激派の一派が、木乃香を狙っているという情報が入っていたのであった。その為、ここ数日は厳戒態勢で木乃香にも外出を控えてもらっていたのであった。徹が呼ばれたのは、木乃香の外出もできず友達とも遊べないガス抜きの意味もあったわけである。今日は独断専行が目立つその一派に処分が下される日であり、今日守りきれれば、その一派は力を失い、以前のような強攻策をとれなくなるはずであった。

徹が帰った後、長が乗った車がこちらに向かってくるのを認めて、

ここ連日神経を尖らせていた彼等は、思わず気を緩めてしまった。その刹那に全ては起こった。

屋敷の周囲を固めていた者達が作ってしまった刹那の隙を、その男は見逃さなかった。周囲と一体化していた隠蔽術を解くと一気に木乃香の誘拐に動いたのである。木乃香が室内にいたなら、それでも誘拐はならなかったのであるが、運悪く条件が揃ってしまった。この日、木乃香は久々に同年代（中身はともかく）の者と遊べたので、羽目を外していた。そのせいで、疲れて縁側に寝てしまっていた。徹か使用人がかけたのであるうタオルケットにくるまって熟睡していたのだ。不運といえばあまりにも不運であったが、とにかく男はまんまと木乃香をさらい、転移呪符で逃亡に成功する。後には、呆然とする護衛達の姿が残るだけだった。

徹がその男を見つけたのは、本当に偶然であった。精神的疲労の極みにあった彼は、高いところに登って風にでも当たろうと、帰り道にある公園の高台に登っていたのである。

そんな彼の真下に木乃香をさらった男は転移してきたのだ。その高台のある公園は、木乃香の屋敷から、程ない距離にあったが、転移呪符の効果範囲で、関西呪術協会の施設から、地理的にもっとも来にくい場所であり、逃亡先としては最適だったのだろう。タオルケットに包まれたままの木乃香を肩にかつぎあげているので異様に目立つ。あまり人が来ないこの場所でなかったら、間違いなく通報されていただろう。

男は焦っていた。色々想定外のことが多すぎたのだ。東との融和を唱える逃げ腰の長だと侮っていたのが、そもその間違いであった。娘に危害を加えると脅してやれば、己が一派に対する処分を取下げらるだろうとタカをくくっていたのだが、長は逆に処分をより重い方

向になるよう誘導した拳句、処分の目を早め、今日に至るまで娘の周囲を嚴重に固めさせた。おかげで、男は派のトップから本当に娘を攫ってくるよう命じられたのだ。男にとっては、青天の霹靂ともいべき命令であった。彼は、隠蔽術こそ西でも有数の使い手であったが、攻撃系の術は苦手であり戦闘力は、無きに等しいのだから。

しかし、命令は絶対である。それに派の処分が通れば、自分も相應の処分を受けるのは間違いない。しかも、なまじ脅迫などしたせいで、それが厳しいものなるであろうことは明らかである。最早、退くに退けない状況になっていた。男は苦悩した末、命令を実行することに決めた。水と食料を用意し、得意の隠蔽術で隠れチャンス伺った。

されど長が娘につけた護衛陣は強力で、いずれをとつても自分が敵う相手ではない。ゆえに男は必死に隙を探したのだが、残念ながら警備の穴はなかった。屋敷内に侵入すれば、たちどころに捕縛されることは眼に見えいていた。

そこで、男は精神的な疲労を狙った。あえて侵入を試みている者がいるという痕跡を残し、護衛陣の緊張を常に解けぬよう仕組んだ。それでも、長のつけた護衛達は優秀で、一瞬たりとも気を抜く事はなかった。結果、男は今日の今日まで、命令を果たせなかったのだが、全てが終わったと護衛達が思い脱力したその一瞬が、男にとつての絶好の機会となったのだった。

そうして、誘拐に見事成功したものの、今後の見通しはよくない。なにせ長の車が戻ってきたのだ。幹部会で、派の処分が下されたのは疑いようがない。つまり、男は間に合わなかったのだ。しかも、誘拐に成功してしまつたせいで、このまま雲隠れすることもできない。男に残された手段は、他の過激派に接触して木乃香を材料に、自身の保身を図ることくらいしかなかった。ただ、現状で自分を受

け入れてくる派は、まずないであろうことも男は理解していた。長の娘というカードは魅力的だが、現状で表立って長と敵対するのは政治的に得策ではないからである。下手をすれば、男の所属していた派のとばっちりを受けかねないのだ。

「くそ、なんで俺がこんなめに。あの馬鹿どもが脅迫なんてするから…」

男は自身の不幸を嘆いた。長を脅迫した派の幹部の愚かしさに反吐が出る。一方で自分の愚かしさにも失望していた。長が戻ってきた時点で、誘拐したところで何の意味もないと分かっていたはずなのに、もしかしたらという希望に縋って誘拐を決行してしまったが、冷静になってみれば、マイナスにしかならないことに気づいたからだ。

この時点で、彼は完全に自棄になっていた。さらに、先程確認した携帯に、派の幹部からのメールで誘拐の中止命令が誘拐実行前に入っていたことは、それを助長する結果となった。これで誘拐は、男が独断で行った行為となり、その責は男が負わなければならないからだ。はつきり言ってしまうえば、身の破滅であった。

そうなる何もかもがどうでもよくなり、どうでもいい事に腹がたってくる。たとえば、自分が苦悩しているのを余所に、平和そうにベンチで眠りこけている小娘の姿とか。男には、それがまるで自分を嘲笑っているかのように感じられたのだ。

（このガキ、長の娘だったよな。何の不自由もなく育てられて、いいもん食って、いいもん着てよ、いいご身分だな！何の心配もしていない顔で無防備に熟睡しやがって、俺みたいな野良犬なんぞ、気に掛ける必要すらないって言うのか?!）

起きて騒がれては面倒なので、男自身が深い眠りに入るよう術をかけたのであるから、完全な言いがかりであったが、もはや狂気に苛まれていた男には、そんなことは関係なかった。男は、傍らで無防備に眠る木乃香に近づくと、腕を振り上げた。ひっぱたいて目を覚まさせてやるつもりだった。振り下ろされるまさにその瞬間、気配を消し様子を伺っていた徹は、飛び蹴りと共に登場したのだった。

「グフツ?! 一体何が?」

飛び蹴りの衝撃でくらくらする頭を振りながら、男は木乃香の方を見た。そこには、お守り役としてきていた少年が、木乃香を後ろに庇う様にして、立っていたのだった。

「なんで、お前がここにいる? まさか追っ手がもうかかったのか?!」

酷く狼狽する男。男はもう追っ手がかかり、しかも位置を補足されていると誤解したのだ、無理もないことである。

「偶然ですよ。たまたま、ここで風に当たっていたら、貴方の方がここに転移してきたんです。しかし、追っ手ですか…。今に至るまでの言動に挙動を総合的に判断するに、貴方は誘拐犯ですか?」

「…ちっ!」

余計なことを言ったと男は齒噛みしていた。目の前の子供は状況を把握していなかったのに、余計な情報を与え、自分の立場を不利にさせてしまっていたからだ。

「くっ、小僧。悪いことはいわねえ。今、ここで見たことを忘れて、

とつと消える。そうすりゃ、お前には何もしねえよ」

「お前には？ということ、木乃香様には何かするつもりなのですね。残念ながら、去ることはできなくなりました」

徹は男の言葉を聞き、目を細めて鋭くし、全身の気を高め退かないという意思を見せる。

「小僧が、お姫様を守るナイト気取りか?! いらつくんだよ! たかだかお守り役風情が大の大人に勝てると思ってるのか?」

「ナイト気取りではありませんが、少なくとも貴方に負けるとは思いませんよ」

苛立紛れに吐き捨てるように言う男に、徹は淡々と対応する。

「はっ! 上等だ、そんなに死にたきゃ殺してやるよ!」

徹の言葉に激昂した男は、徹に殴りかかって来た。男には、それなりの勝算があった。ただか、10にも満たぬ小僧に自分が負けるとは微塵も考えていなかった。なにせ、男と徹では、身長差は40cm近くあるし、攻撃術が苦手な男は格闘については、それなりに身につけていたからだ。

しかし、男の勝算は徹があくまでも普通の子供であったときのものである。男は忘れるべきではなかった。お守り役とはいえ、長の娘につけられた者だということ。何より彼が妖閃翁の息子であることを。

「ゲフッ、オゴッ」

グシャバキと洒落にならない音を立てて、吹き飛ばされたのは男の方だった。殴りかかってきた男に対し、徹は悠々とカウンターをあわせ、逆に殴り飛ばし、追討ちで意識を刈り取らんばかりの蹴りを叩き込んだのだ。

「言ったはずです。負けるとは思わないと。」

さて、どうしたものですかね？とりあえず、沙霧さんに連絡しましょう。あちらでは大騒ぎになっているでしょうからね。

しかし、誘拐されそうになった女の子を助けるとか、どこの物語の主人公だよ……」

汚れを払うような動作をすると、徹はそう言い捨て、徹は懐から携帯を取り出していた。既に男から興味を失い仕事モードをといっていた。それは初の実戦故の油断か、慢心か。それとも、素の口調で言っていたように現実を物語のように見ている弊害か。とにかく、彼は戦闘態勢をといてしまったのだ。男が無力化しているかどうか、確認もせずに！

（なんてガキだ。頭はがんがんするし、顎は完全に碎かれてやがる。どういう力してやがるんだ……。クソツタレめ！あんなガキにやられるなんて、最後の最後まで俺の人生にはケチがつくのかよ?!くそ、もう注意を払う価値もないってか?のんびり電話なんかしやがって！。どいつもこいつも、俺をなめやがってー!!!

殺す、絶対に殺す!あのガキだけは絶対に殺す!どうせ、俺はもうお終いなんだ。今更、殺人の一つや二つ犯したところで大差はねえ!)

うつ伏せに倒れ伏した男は、朦朧とする意識の中で電話をかける徹の姿を見つめていた。最早、此処に至って男の望む未来はありえなくなつた。そんな男にとって、鬱憤晴らしを邪魔した拳句、自分の

ちつぽけなプライドをも根こそぎ粉碎してくれた徹は、不倶戴天の敵となった。徹が生きていることを許すことができない。徹の屈辱と恐怖に塗れた顔が見たいと男は心から望んだ。だが、自力では不可能だ。徹の力量は自分より上だ。唯一優れているであろう隠蔽術を用いたところで、なんの足しにもならない。しかし、運命というものがあるなら、それはとびきりに残酷で悪戯なものなのだろう。男は、それを可能にする手段をこの日に限って持っていた。自身の家系に伝わる家宝『鬼封札』を。

だが、それは諸刃の剣である。その札は、男の祖先が名のある鬼を封じ込めたものであり、これを使用すれば自身はその鬼の力を得るが、代わりに鬼と化してしまうのだ。

本来ならば、男にとってそれはけして使うべきものではなかった。男とて、鬼になってまで事をなしたいとは思っていなかったし、あくまでも隠行の補助具として念には念を入れるつもりで持ってきたに過ぎないからだ。

だが、此処に至って男に躊躇する理由はなかった。もしここで逃げ延びたとしても、自分に全ての責任が押し付けられるであろうことは目に見えている。最早、自身の破滅は避けられないのだ。ならば、徹に一泡ふかせられるなら、殺せるならどうなってもよかったのだから。さらに、ここで木乃香を殺せば、自分の所属していた派の連中も、散々邪魔してくれた護衛の連中も、ただでは済まないだろうという打算もあった。

そうして、男は緩慢な手つきで懐に入れた『鬼封札』を引つ張り出す。そして狂気に支配された表情で、それを破ったのだった。

沙霧への連絡を終えて、とりあえず一件落着と脱力していた徹がそれに気づけたのは、強大な妖気の奔流を感じられたからにすぎない。

慌てて目をやれば、そこにはスーツの切れ端を纏った青黒い鬼が立っていた。

（なっ！あれはやばい。なんだあれ？あのおっさんに、あれ程の鬼を呼べるわけないし、わけがわからない。それにおっさんはどこ行つたんだ？…あのスーツの切れ端、おさんが着てた奴か？！人が鬼になつたつていうのかよ！）

徹は、一目見て直感した。あれはやばいと、いてはならないものだと。すぐさま、戦闘態勢に入ろうとするが、一度弛緩した体を緊張状態に持つていくのは至難の業である。ましてや、まだ修行中の身であり、初の実戦である徹には荷が重すぎた。思うように、体が言う事をきかないことに歯噛みしながら、徹は懐から素早く札を取り出すと、破り捨てた。虚空に自身の相棒である『封蛇』が現れる。それを握り締めると、木乃香を背にかばうようにして剣を構えた。果たして、徹のこの行為は正しかった。もし、『封蛇』をだしていなければ、弛緩した体では反応しきれずに飛び込んできた鬼がふるった爪の直撃を受け、死んでいたであろうから。構えた『封蛇』にたまたま爪が当たらなければ、吹き飛ばされるだけではすまなかつたのだから。

「ぐはっ、洒落にならん。なんだよ、これ？これが本物の鬼…」

木乃香を巻き込まないでいられたのは幸いだったが、徹は無造作に振られた鬼の剛腕によって高台へと叩きつけられたのだった。全身に凄まじい衝撃と痛みが走り、愕然とする。彼は、ここにきて初めて戦闘の恐怖を知つたのだった。鬼は、徹を傷めつけることの方が優先のようで、木乃香には見向きもしない。一步一步、緩慢な動作ではあつたが、徹に近づいてくる。徹にはその近づいてくる足音が、死神の足音に聞こえた。

（死にたくない、死にたくない。また、あんな痛い目にあうのは絶対にごめんだ！せつかく第二の生が手に入ったっていうのに、こんなところで…、死んでたまるかー！！）

「うおおおー！」

死にたくない一心で、気合をこめ立ち上がる。紫紺の邪眼が勝手に発動し視界が変わる。自身の状態を『理解』し、強制的に戦闘態勢へともつていく方法を『理解』し実行する。自身が制御していた身体能力の枷を外し、気を最高まで高める。瞬時に徹は、自身の体を可能な限りの最高の状態に持っていたのだった。

だが、それをもつてしても鬼は強かった。鬼の腕の一振りには地を抉り、咆哮は徹の勇気を奪い、その身を萎縮させる。人外の速度で斬りつけても、人外の速度で対応されるどころか反撃を受ける。それを紙一重でかわすも、休むことをゆるさない追撃が加えられ、防戦する一方となってしまうのだった。たまに、見事に斬撃が入るが、鬼の頑強な肉体には、浅い傷しか入らない上に、その優れた回復能力ですぐに回復されてしまう。あれでは、腕の一本や二本とったところで問題にならない。容易に再生されてしまうであろう。

自身の頼みとする得物の攻撃は効果が薄く、実力では負けないつもりだが、いくら鍛えていると言っても、子供の身だ。大人どころか人外の存在である鬼に敵うわけが無いし、初めての实战であるためか、徹の気力・体力は想像以上のスピードで消耗していたのだ。その上、徹が頼みとする封神妖幻流も、『封蛇』の現状で用いれる妖気の量では効果が薄い。辛うじて妖断壁をはり、自身と木乃香を鬼が吐き出す妖気と呪詛の影響から守るのが、精一杯であった。はつきり言って、ジリ貧であった。

(くそつ、やばい。このままじゃギリ貧だ。沙霧さん達が到着するまで、後10分以上かかるっていうのに、この分じゃ5分ももつかどうか…)

こんなんじゃ、木乃香も俺も死ぬことになる。『封蛇』がもつときいてくれれば。…はっ、そうか！)

徹は、自身が未だ『主』に至れていないことに活路見出した。『主』に至れば、『封蛇』はその真の力を解放し、この状況をひっくり返せるかもしれない。しかし、同時に不安もあった。己がこの土壇場で『主』に至れるのかという不安が。

「頼む『封蛇』！応えてくれ！」

全力をこめた強引な一撃で鬼を吹き飛ばすと、徹は不安を押し殺し、自身の相棒に声をかけるが、頼みの綱は一向に変化の兆しを見せない。

「頼む『封蛇』！なんで応えてくれないんだ？！俺は、お前の…ゴッ」

悲痛な叫びで、呼び掛けを続ける徹であったが、『封蛇』には変化はない。そして無常にも時間切れであった。徹の目の前には、その剛腕を振り上げた鬼の姿があつたからだ。

振るわれる剛腕。只人であれば、内臓破裂を起こしたであろうそれを脇腹にくらい、『封蛇』を握つたまま無様に地面を転がるように吹き飛ばされ、木乃香を寝かせた高台の壁に叩きつけられる。拳であつたことが幸いした。もし、爪での攻撃であつたなら、引き裂かれていたであろう。それでも、被害は甚大だ。拳を受けた脇腹を中心に肋骨が折れている。破裂こそしなかったものの、内臓にダメージがいったのは間違いない。吐血し、地面にうずくまる徹。最後の

手段が失敗した精神的なショックと全身を襲う激痛が、彼から立ち上がる気力を奪っていた。

（こんなところで死ぬのか？いやだ、死にたくない。でも、だからといってどうするんだ？頼みの綱の『封蛇』は応えてくれないし、今の俺の体じゃ、さつきみたいに動けない。

ほら、為す術なんてないじゃないか！初めての实战でこれだけ頑張ったんだ、もういいじゃないか。しよせん、ただの一般人である俺にはこの程度が限界だったのさ。

はは、俺の物語はこれで終わりか…）

諦めが徹を支配する。瞳は紫紺から真紅に戻り、悔し涙すらせず、諦めの笑すら漏れる。完全に戦う気力をなくしていた。だが、鬼はそんなことを勘案してくれる相手ではない。うずくまった徹に、これもかといわんばかりに容赦のない蹴りを加えた。壁と地面をピンボールのように跳ね回り、力なく倒れ伏す徹は、どう見ても瀕死の重傷であった。

鬼は、なんの抵抗もしない徹に飽きたようで、最後に一蹴り加えると高台の上へと向かったのだった。

（まさか、木乃香の方へ？やばい、このままじゃ…うん？待てよ、まさか木乃香ってあの木乃香か？！漫画での姿、しかも中学生当時しか知らなかったから気づかなかったけど、面影はあるし、あの独特の天然ぶり間違いなく木乃香だ。なんてこった、原作キャラとあっていたとはな。そうだ！彼女は原作キャラなんだ、こんなところで死ぬはずがない！）

薄れゆく意識の中で、今さらながらにその事実気づき、そんなことを思う徹であった。

「ゲフツ、ゴホツゴホツ…。」

洒落にならない衝撃と痛みを腹に感じ、咳き込みながら徹は覚醒した。どうやら、鬼に蹴飛ばされて無理やり起こされたようだ。その証拠に彼の目の前には、高台から連れてきたのであろう木乃香を抱えた鬼が立っていた。

「な、何のつもりだ？」

「オレ、オマエノマエデコノムスメコロス」

徹は駄目元で鬼の意図を尋ねるが、なんと喋れたらしい鬼は片言ではあったが、非情で受け容れ難い答をかえしたのだった。

「な、なんでだよ！何の為にそんなことをする?!」

「オマエガコノムスメヲママモツタカラダ。つまり、オマエノセイデコノムスメハシヌ」

「お、俺のせい？俺が守ったから…?」

「ソウダ、オレコノムスメコロスキナカッタ。デモ、オマエノクルシムカオミタクテコロスコトニシタ」

徹の疑問に鬼は非情な答を返す。この娘が死ぬのはお前のせいだと、お前が余計なことをしなければ、この娘は助かったのだと。

「ま、待てよ！その子は、こんなところで死んじゃいけないんだ！

俺なら何でもする！命だつてくれてやる！だから、その娘は助けてくれ！」

「ウーン」

悲痛な声で懇願する徹に考えこむような仕草で唸る鬼であった。徹はもしかしてと希望を見出すが…、次の瞬間それは最悪の形で裏切られる。

「ダメダ。オマエガソコマデクルシムナラ、ナオサラコロス。オノレノムリヨクニフルエナガラナサケナクシヨマツガイイ」

そう言つて醜悪な笑みを浮かべて、これみよがしに木乃香の頭を片手で掴みあげる。

「待て、待ってくれ！」

（なんだよ、これ！なんでだよ！なんでこんなところで木乃香が死なないといけないんだ？！しかも俺のせいだ！そんなの受け容れるかよ！大体、おかしいじゃないか？原作どおりなら、こんなところで木乃香が死ぬはずないんだ。だから、助かる。助かるはずだ！きつと木乃香が殺される前に、沙霧さん達が来てくれるはずだ！）

その刹那、未だに漫画の物語の中にいるという認識を捨てられぬ徹はそんなことを思う。

だが、同時に彼の中で初めて疑問が沸き起こる。

（でも、待てよ、ここは本当に漫画の中なのか？俺というイレギュラーがいるのに、原作どおり話が進むのか？この体の痛みは偽物なのか？）

もし、俺のせいで木乃香が殺されるとしたら、それは最早原作とは違うものだ。それに、奴は言った、俺が余計なことをしなければ、木乃香を殺す気はなかったと。木乃香を殺すのは俺への復讐なのだ。

俺がなにもしなければ良かったのか？俺が木乃香があいつに叩かれるのを見過ごせばよかったのか？そうすれば、木乃香は助かったのか？)

己というイレギュラーは何もすべきではなかったのではという思いに囚われる徹。しかし、鬼の邪悪な喜悦に染まる顔を見て、その思いを否定する。

(否、断じて否！そんなこと許せるはずがない。こんな糞野郎に、木乃香が傷物にされるのも、殺されるのも許せるはずがない。運命？原作？知ったことか！俺は確かにここに生きているんだ！何もしていないなどというのは死んでいるのも同じことだ。何の為の二度目の生だ！何の為に契約を受け入れてまで、この生にしがみついた？それは『生きる』ためだ！死人のようになにもしないでいる為じゃない！)

そうだ、何の為にここまで生き延びたんだ。何の為に死ぬような思いをして鍛錬を積んできたんだ。全ては俺が俺として、この世界で生きる為だったはず…。俺自身の道を貫き徹するための強さが欲しかったからこそ、俺は力を求めたんだ。けして、死にたくないなんて後ろ向きな理由なんかじゃない！

俺が俺として生きる以上、これは現実だ！目を逸らすな！逃避するな！現実には逃げ場などない！都合よく助けが来てくれるなんてことはないんだ！目の前にいる死に瀕した娘をお前が助けなくて、誰が助けるというのだ？！『小宮山 徹』！)

それは覚悟、それは誓。徹がその名を徹心から、貰い受けた時に心

に刻んだはずのものであった。鍛錬の日々とありえない自己の能力によつて、現実としての認識が薄れ、いつしか消えかけていたそれが、今度はけして消えない形で心に刻まれた。信念という形で。そんな徹の内心の変化を余所に、鬼の手に力がこめられようとしていた。木乃香の頭は掴まれたままであり、もしこのままならば、石榴のように碎かれるであろうことは間違いなかった。最早、木乃香の命は風前の灯火であった。

しかし、今の徹がそれを許すわけがない。いつの間にか起き上がったのか、徹は鬼すら知覚できないスピードで、『封蛇』を用い木乃香を捕えていた腕を切り落としたのだ。先程までの切れ味とは、比べ物にならない。しかも、徹との距離は明らかに剣が届く間合ではない。

「コ、コレハ?!オマエナニシタ?」

「斬っただけさ。そう、ただそれだけのことだ」

傷口を押さえ問う鬼に対し、徹は木乃香を腕から解放し、傍らのベンチに寝かせると淡々と答えた。手には幾つにも刃が分裂した『大蛇』の姿がある。

「バカナ、オマエノケンデハコノキヨリデオレニキズヲツケラレルハズガ…!!」

それに納得できない鬼は、今までの経緯からアリエナイといおうとしかけ、そこで自分以外に、強力いや膨大な妖気を発しているものが存在していることに気がついた。

「オマエ、ソレオナジケンカ?!」

「ああ、そう…いや、正確には違うな。さっきまでこいつは寝ていたんだ。さっきまでのこいつは本気じゃなかったどころか、実力の一割もだしていなかったのさ。俺が不甲斐なばかりにな。そうだから『ふ』いや『大蛇』よ！」

そう、鬼をも凌ぐ妖気を発してるのは、徹の手に握られている『封蛇』改め『大蛇』であった。徹の呼び掛けに応え、『大蛇』は真紅の輝きを増し、それは剣身に収束していく。

「バ、バカナ。オレヨリツヨイヨウキ?!オマエホントウニニンゲンカ?」

自分をも凌ぐ妖気を発する妖刀を何の問題もなく使っているこの少年は、本当に人間なのかと鬼は本気疑問に思った。

「一応、そのつもりだけだな。まあ、体の方は厳密にはそうとはいえないだろうけど。

でも、心は人間だ!てめえみたいに、身も心も鬼に堕ちてしまった奴とは違ってなあ!」

「ダメレ!」

徹の答に激昂する鬼は、無事な腕を叩きつける。しかし、それはあつさりとかわされ、その刹那に、その腕に巻きついた刃の蛇に3分割される羽目になった。紫紺に染まった瞳がその動きを『理解』し、徹に連結刃という扱いが困難な武器を用いて、いかにして斬るかを『理解』させたのだった。

「GYAAAAAAA」

鬼の人ならざる絶叫が響く。両腕を失い、立ち尽くす鬼。やはり再生の兆しはない。

「ナゼ、サイセイシナイ?!」

「これこそ我が流派、封神妖幻流の粹。我が妖刀によって斬られた傷は、俺が許さぬ限りけして治ることはない。なにせ、傷口にはとびきりの呪詛と妖気を擦り込むんだからなあ」

「オ、オマエー!」

「さあ、終焉だ。黄泉路の土産だ、受け取れ! 鶴の牙は紫電を纏い、魂をも穿つ 紫妖雷穿牙『鶴』!」

絶叫する鬼、酷薄な笑みを浮かべて終焉を告げる徹。そして、次の瞬間『大蛇』が纏う真紅の輝きは紫電の雷へと変化する。立ち尽くす鬼に刃の蛇はその顎門を剥いたのだ。刃蛇は寸分変わらず鬼の中心を刺し貫き肉体に絡みつくと、その身を波打たせ細切れにする。細切れにされた肉体は、紫電に灼かれ跡形も無い。

「ああ、しんどかった。正直、死ぬかと思ったわ…。お疲れ、俺。

『大蛇』、お前もご苦労さん。ありがとな、お前と木乃香のおかげで、大切なことを思い出せたよ」

分裂した刃を連結し元に戻した『大蛇』を地面に突き立て、寄り掛かるようにして座り込む徹。『大蛇』が徹の労いの言葉に応えるように一瞬鳴動する。その様子を見て、どうやら己は『主』になれたようだとはっとする徹であった。

「何がうちのおかげなん？」

そんな徹を驚かせたのは、いつの間に起きていた木乃香の声であった。まあ、地面ぶち抜いたり、間近で雷が轟いたりしていたのだ。むしろ、起きない方がおかしいだろう。座り込む徹の前に立って徹の顔を覗き込むように首を傾げている。

「いや、あの…」

この不意討ちには徹も慌てた。なにせ、完全に気を抜いていたのであり、肉体的にも精神的にも疲労が溜まっていたからである。

「うーん、まあええわ。うちのこと助けてくれたんやろう？ありがとうなあ。さっきのほんまに凄かったでー」

（うわ、マジかよ。見られてたのか?! どうしよう、俺のせいで魔法バレしたなんて知られたら、詠春に殺されるかもしれない…）

木乃香の言に戦々恐々とする徹。そんなことも知らずに木乃香は、無邪気に感嘆する。

「徹君、強かったんやなあ。うちと一歳しか分らんのにほんまに凄いなあ。その剣、ばらばらになったり、のびたりしておもしろいなあ。うちにも貸してくれんかなあ？」

「いやいや、流石にそれは無理だから。（それにしても、今の言い様だと俺が『主』になった以降を見ていたっばいなあ。これはどうしたものかな…）」

苦笑しつつ応えながら、どうしたものかと考えを巡らせる。そこで

ふと話題になった『大蛇』を見ると、その時脳裏に閃くものがあった。

(そうだ！まだ、恐らく大丈夫なはずだ。うまくいけよ！)

「木乃香、俺の目を見てくれないか？俺の目は今何色だ？」

「なにゆーてるんや。徹君の目の色は真紅やろ…って、嘘、なんで紫や」

徹の言葉に従い、徹と目を合わせる木乃香。その顔は、純粹な驚きに染まっている。

「木乃香、すまない。許してくれとは言わないが、少なくとも今はこちらに来るべきではないと、俺は思うんだ」

「なんで謝る……」

その言葉の意を質そうとした木乃香の目が焦点を失い、無表情になる。徹は紫紺の邪眼を用いて、暗示をかけたのだった。

「今日、君はある少年と遊んだ。だが、少年の顔も名前も思い出せない。その理由は幼い頃の記憶ゆえだ。君が誰かに誘拐されたという事実はないし、何も見ていない。縁側で寝ていたはずなのに、夢の中ではなぜか公園でねていたというおかしな夢をみたに過ぎないいいね？」

徹の言葉に、無表情のまま頷いた。それを確認すると徹は最後の暗示をかけた。

「君は今とても眠い、だから眠ってしまおう。寝て起きれば、再び君の家だ。それは縁側かもしれないし、君の部屋かもしれない。前者なら、そのまま寝ていたのだろうし、後者なら誰かが運んでくれたのだろう。君は疑問を覚えなさい。おやすみ」

徹の最後の言葉とともに崩れ落ちる木乃香。それを抱きかかえながら、徹は呟く。

「俺の目を覚まさせてくれたお前にこんなことをするのは、正直気が咎めるんだが。お前の為にも、今日のことはなかった事にした方がいい。なにせ、俺は鬼に墮ちたとはいえ人を殺した。お前は気づいていなかったようだがな。」

お前を守るためもあったとはいえ、お前がそれを背負う必要もない。お前はただ巻き込まれたにすぎないし、これは俺が背負うべき罪であるのだから」

実際に口に出すと一層その罪を実感する。『殺人』という禁忌を犯したことに全身に震えが走る。返り血を浴びていない筈の両手が鮮血に塗れているような気がする。こんなものを10にも満たぬ少女に背負わせるわけにはいかない。それに、何より徹は今日の事を完全に忘れて欲しかった。特に一緒に遊んだ時の記憶を。

(現実を現実としてとらえず、木乃香をちゃんとした一人の人間であると感じていなかった俺との記憶なんて覚えていて欲しくないからな)

「今日、君と過ごした俺は正直最悪な人間だったと思う。でも、前のおかげで、俺は大切な事を思い出せた。だから、今度会ったときは、もつとましになっていることを誓うよ。その時こそ、改めて友になるう」

それは徹の勝手で一方的な誓ではあったが、真摯なものであった。徹のその真剣な表情と慈しむような口調からは、彼がその誓のために最大限の努力をしようとしていることが伺えた。

もつともこの誓のせいでも、己を誇れるようになるまで、木乃香に会うまいと決めた徹は、偶然の出会いを恐れて、詠春に近づくのを避けたりするのだが、出稽古先で会ってしまった拳句、よりもよつて護衛を依頼されてしまい、無駄な努力になったのは余談である。

ちなみに、徹の暗示は見事に効き、木乃香は綺麗さっぱりこの日の事を忘れる。ただ、誰かと遊んだような記憶があるようなだけである。

また、今回の事件の解決に最も寄与したのは徹であったが、誘拐した男の排除の件含め、木乃香を発見し取り戻した功績を全て護衛達に譲ることを条件に、徹は己がこの件に関与したことについて口外することを禁じたのだった。護衛達は、自分達の名誉も守れ、ミスも取り返したことになるので、一も二もなく此の話に飛びついた。唯一沙霧だけが、納得のいかない顔をしていたのだが、彼女以外の全員が賛成となれば、賛成にまわるほかなかった。ただ、沙霧はこのことを鶴子唯一人に教え、それが原因となつて徹と鶴子の縁が生まれることになるのだが、それはまた別の話である。

初仕事と大蛇（後書き）

<封神妖幻流 術技解説>

『紫妖雷穿牙しよつらいせんが 鶴ぬえ』：一説では雷獣であるといわれる大妖『鶴』にあやかった技。妖気を紫電の雷へと変え、それを纏わせた武器の貫通力・切れ味等を強化する。雷自体もかなりの攻撃力を誇るため、武器そのもと併せた破壊力はかなりのものである。徹は突き技のように使ったが、この技の本質は武器に雷を纏わせることによる強化にあり、斬撃なども可能。

感想ありがとうございます。励みになります。

1000件近いお気に入り登録をして頂き、驚きと喜びで胸が一杯です。このような拙作を読んで頂き、心より感謝申し上げます。

何かアンチであるという評価を頂き、私が書きたいと思っている主題と離れてしまっているのではと考えさせられる今日この頃です。

学園編は説教くさい場面が多いですが、全体として見ればそんなに多くないと思うのですが、どうでしょうか？

まだまだ未熟な身ですので、精進してもっと書きたいと思っている主題を理解して頂けるよう頑張りたいと思いますので、これからもお付き合い頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6872q/>

紫紺の邪眼 夢幻の章

2011年2月6日01時31分発行